

# 熏風

教育委員会だより

第七号

平成三十年一月一日(月)

河内長野市教育委員会

## 「混ざる」

迎春

地域から“群れる”機能が消えたと言われて久しい。以前、厚生労働科学研究所が興味ある調査を行った。その報告書には、“誰ともしゃべらないで暮らしている”人が20年前の2倍になったという。さらに、“子供と一緒にいるとイライラする”人が3倍にもなっていた。


「ヤマアラシのジレンマ」という言葉を聞いたことがあると思う。哲学者ショーペンハウエルの寓話を元に、フロイトが考え出した人間関係を象徴するたとえ話であるが、一匹で寒さに震えていたヤマアラシは、温かさを求めて他のヤマアラシの傍に近づく。ところが、近づき過ぎると針が刺さり近づけない。くっつきたいがくっつけない。と言って、離れたいが離れられない。こうした葛藤をいうのである。

人と人の関係もヤマアラシに似ている。しかも、相手によって針の長さが違うだけにトリレンマの状態にもなる。人間関係というものは、より高度な関係調整力の求められる実に厄介な課題といえよう。そして、私たちは、この適度な距離感を、多彩な価値観に“群れる”経験の中で身に付けてきたと言えよう。

戦後日本の経済復興の道は、今、振り返ると、“孤立への道”であったようにも思う。60年代、核家族化が広がり始め、“外食元年”と呼ばれる70年、さらに、80年代には冷凍食品が現れた。一方で、90年に入り、アメリカに影響を受けた減反政策の影響もあり、グローバル化の流れの中で“食の自由化”が一気に加速化した。昭和50年に79%もあった我が国の“食料自給率”は、平成20年には40%まで低下している。

私たちが幼い頃には、田植え、秋祭り、冠婚葬祭と、各地で共同体が機能し、“群れる”人々の姿が見られた。しかし、前述したような“孤立への道”の歩みで、本市に“トトロの世界”が健在であったのは、昭和50年頃までなのかもしれない。

都心部では今も、多くの人々が集まっているように見える。しかし、人間は密集化が進めば隣人をモノと同じ様に感じると言われるように、モノの“群れ”なのである。



渡り鳥がV字編隊をつくって勇壮に飛ぶ様子を見たことがあると思う。隊の最も先頭を受け持つのは、“群れ”の中で一番元気な鳥だという。前を飛ぶ鳥がつくる上昇気流に乗れば体力の消耗を少なく出来るからで、疲れると交代するという。つまり、“群れ”が飛距離の秘訣なのである。人も鳥たちに学びたいものである。

コミュニティが成立する要素は、その集団に“共通の目標”“協働の意欲”“互いの人間関係”があることと言われるが、“弧”になりがちな“個”を社会的存在にまで高める機能は、“群れ”の中に秘めているのである。

昭和42年、文化の日に制定された河内長野市市民憲章に、「私たちは、人人との交わりを大切にします」という文章が謳い込まれている。“群れる”機能が弱体化し始めている街に危機感を感じた当時の人々の思いが感じ取れる。

このように、“群れる”ことの教育的意義は実に大きい。しかし重要なのは、その“群れ”を構成する色である。

つまり、“清濁併せ呑む”という言葉の通り、群れの中に多彩な色が同居していることが大切なのである。

横浜国立大学の名誉教授である宮脇昭氏の話聞いた人は多いと思う。

九十歳近くになる方だが、国内各地はもちろん、ボルネオやインドネシア、ブラジル、中国と世界の各地に何度も出向き、精力的に“森づくり”に邁進している生態学者である。

「人間、本気になって出来ないことはない」と、“ふるさと”の木による“ふるさと”の森、つまり、“鎮守の森”を世界中につくるために数千万本の木を植え続けている。


植林は、同じ種類の木を等間隔に筋状に植えるのが一般的と言われる。それは、木材に加工する際に規格が重要だからである。しかし、教授のこだわりは違う。

一種類の木を等間隔に植えるのではなく、何種類もの木を不規則に植えることで、植物界に競争、我慢、共生を生み出せるというのである。その結果、高木・亜高木・低木・下草が豊かに育つ森が出来るというのである。

教授は力説するのは、“混ぜる”ことが生物社会の掟であるという思いである。

日々、全く異なる人格の子ども達に触れる私たち教育関係者は、この自然界を貫く理念に学ばなければならないと思う。

2020年の春、『軽井沢風越学園』が開校するという記事があった。現行法上、公立では壁が高いため私立としてスタートするらしい。幼・小・中



一貫のごくごく普通の学校らしい。ところが、将来の公教育のモデル校と言われているのである。

建学の精神は、“同じ”から“違う”。“分ける”から“混ぜる”である。

つまり、年齢や男女、障害のあるなしで学習集団を編成するのではなく、多彩な“個”が混在するような仕掛けがある。

子どもたちは、その多様な“群れ”の中で自己を失わず、自分の問いに対して自分なりの方法で調べ、協働探究しながら、自分なりの答えを見つけ出していく学びを展開していくというのである。

同質よりも多様性、さらに多様性が混ざり合う環境を準備することで、AI（人工頭脳）が活躍するグローバル化した世界でも活躍できる人材を育成しようというのである。ちなみに、創始者は、楽天創業時の副社長、本城慎之介氏である。

健全な社会というのは、同質の集団ではなく、異質な考え方や価値観、様々な特質を持った人々が“混ざる”ところに意義がある。我が国の社会を構成する多様な家庭の子ども達全員が集まる公立学校の存在意義も、実は、“混ざる”ところにあることを改めて確認したい。砂漠の中で、社会性を持った子どもは育たないのである。

私たちは、今、従来の制度やシステムの上にあぐらをかいていられない時代を迎えているのである。

（文責：教育長 和田 栄）